

読売新聞社賞『氷結した海を砕く斧』 上野 叶恵

ユダヤ人作家のフランツ・カフカは「本とは、僕らの内の氷結した海を砕く斧でなければならない」と言った。ならば私は、教育によって氷結した海を砕こうと思う。

私は歴史分野で教育者になりたいと考えている。小学生の頃から歴史が好きだったことと、数年間プログラミングを習っていた経験から、将来はその2つに関するをやりたいという漠然とした気持ちがあった。高校生になり自分の進路を考える中で、その気持ちを「教育」にいかそうと決めた。理由は「無関心」をなくすためだ。

たとえば、クラスで多数決を取るときに、周りを見て多い方に手を上げる。面倒だから、自分の票は政治に関係ないと思うから、選挙に行かない。その根源にあるのは「無関心」あるいは「諦め」だと思う。私は、日本人が無関心や諦めを捨て、自分の意見や高いモラルを持つ社会を作りたい。そのような時に、高校1年の夏にアメリカへの短期留学で訪れたアーモスト大学での体験が思い出される。案内してくれた学生にかなりの頻度で「何か質問は？」と聞かれた。グループディスカッションに参加した時もメンバー一人一人の意見が求められた。個人が重視され、自分の意見とそれを表現することが求められる社会だった。私は、そのような活発な社会を築くためには教育の力が不可欠だと思う。アーモスト大学のチャペルには新島襄の肖像画が飾られていた。彼は「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず」と述べた。新島が目指す「良心」というのは、単に清らかな心を持つことではなく、聖書にも度々登場する「悔い改める」精神だと思う。

悔い改める時、私たちは過去を振り返る。私たちが歴史から学ぶ時、未来は少し明るくなるだろう。そして、その時に最も大切なのは、教科書の内容をただ暗記することでは無い。歴史が現在と繋がっていることを理解し、その中で課題解決のヒントを探せるようになることだ。しかし、今の日本の学校教育でこれができるようになるのは難しい。私が歴史に興味を持ったきっかけは授業ではなく、ゲームや漫画だったが、単純に歴史モノの娯楽を作ればいいわけでもない。それらは興味のきっかけとなるだけで、教育にはなり得ないからだ。そこで中高生向けに「興味のきっかけ作り」と「授業」を同時に行えば、興味を持ちながら、歴史から学ぶ若者が増えると考えた。私は将来、IT技術を活用して、歴史を「体感」できるようなシステムや教育の場所を作り、新しい教育の形を模索する。歴史教育によって、社会に対して問題意識を持ち、その背景まで理解し現状を変えようと試みる人を増やすことで、社会にはびこる「無関心」や「諦め」を減らしていきたい。

この国の「無関心」という氷結した海に歴史教育という斧で砕く。それが私の志だ。